

魏志倭人伝で陳寿が用いた「春秋の筆法」を解読して得られた8つの解 その2 「陳寿は邪馬台国の戸数(人口)を10倍にしていた」他

細川 ^{よしひろ} 圭弘

本論文は2021年2月に日本古代史ネットワークのホームページ上で公開された、その1の後編部分にあたる。

その1では、陳寿が用いた「春秋の筆法」を解読することにより、魏志倭人伝の中の「距離の里数表記」が10倍にされていることを立証した。

本論文では「春秋の筆法」を解読することにより得られた8つの解の内の、残りの7つの解について順を追って解説していきたい。

まず、8つの解とは下記の通りである。

- 一、距離の里数表記・・・その1で解明済
- 二、魏志倭人伝に登場する国々の戸数(人口)
- 三、邪馬台国(連合国家)の大きさ(卑弥呼の力が及ぶ範囲)
- 四、女王国の東千里餘(100里余)
- 五、卑弥呼に仕える婢人の人数(千人ではなく100人程度)
- 六、卑弥呼の墓の大きさ(径10歩余り、約13.85m~14.85m)
- 七、卑弥呼の墓の殉葬者の人数(百余人ではなく10人程度)
- 八、魏の明帝から卑弥呼に下賜された銅鏡の数(100枚ではなく10枚)

本論文では「二、魏志倭人伝に登場する国々の戸数(人口)」が10倍に表記されていることから解明して行きたい。

二、戸数表記も10倍されていた

魏志倭人伝には道程記事と併せて国々の戸数に関する記事がある。この戸数の記事から邪馬台国の人口が推定できる。

対馬国=千余戸、一支国=三千許家、末蘆国=四千余戸、伊都国=千余戸、奴国=二万余戸、不弥国=千余家、投馬国(殺馬国)=五万余戸、邪馬台国=七万余戸

邪馬台国は戸数7万戸余りとあるが、倭国より以前に「親魏月氏国王」として冊封された大月氏国は戸数10万戸、人口は40万人(『後漢書』列伝78西域伝大月氏国条)といわれている。中国王朝は古くから戸籍調査が行われ、戸数・口数(人口)の記録が残されている。

前漢末期の西暦2年の人口、58,062,854人・戸数は12,254,541戸、1戸当たり4.73人。

後漢の時代140年の人口、47,815,051人・戸数は9,480,317戸、1戸当たり5.04人。

西晋の時代282年の人口、15,352,557人・戸数は2,326,145戸、1戸当たり6.60人。

(『人口の中国史』岩波新書 上田信)

邪馬台国は7万余戸で、1戸(律令時代の戸の編成とは異なる)当たりの人数を5~6口(人)とすると、人口は35~42万人となり、大月氏国の40万人に匹敵する人口を抱える国ということになる。このように比較してみると魏志倭人伝の戸数表記も陳寿により10倍で表記されているのではないだろうかという疑念が湧いてくる。邪馬台国の人口は本当に35~42万人もいたのだろうか、と・・・。

邪馬台国の人口を推定する

この時代の倭国の人口はどのくらいだったのだろうか。

ここに古代の日本の人口を研究した資料(図-1)がある。歴史人口学の鬼頭宏氏による『人口から読む日本の歴史』(講談社学術文庫)の『表1 日本列島の地域人口:縄文早期~2100年』から一部を抜粋し、年代表記を解りやすくした表である。人口は主に同年代の遺跡数を基に算出されている。

鬼頭氏の人口推定によれば、西暦200年頃の日本の総人口(北海道・沖縄を除く)は推定594,900人であるとされている。地域別の九州では北九州が40,500人、南九州が64,600人、九州全体では105,100人である。

日本列島の地域人口(参考資料:『人口から読む日本列島の歴史』講談社学術文庫 鬼頭 宏)

単位:千人

地域 年代	北海道	東奥羽	西奥羽	北関東	南関東	北陸	東山	東海	畿内	畿内周辺	山陰	山陽	四国	北九州	南九州	全国合計
BC6100	—	1.7	0.3	2.5	7.2	0.4	3.1	2.1	0.1	0.2	0.1	0.3	0.2	0.8	1.1	20.1
BC3200	—	14.3	4.9	12.6	30.2	4.2	25.5	4.8	0.4	1.3	0.5	0.9	0.4	1.4	4.2	105.5
200	—	28.7	4.7	39.3	59.7	20.7	85.1	54.4	30.2	70.3	17.7	48.9	30.1	40.5	64.6	594.9
725	—	206.5	78.0	356.9	422.8	252.6	121.9	488.7	457.3	503.0	350.4	439.3	275.7	340.5	218.6	4512.2
800	—	186.0	80.3	451.4	519.5	461.4	184.3	413.9	583.6	596.3	456.2	541.0	335.0	422.3	275.2	5506.2

北海道: 蝦夷 / 東奥羽: 陸奥 / 西奥羽: 出羽 / 北関東: 上野、下野、常陸の合計 / 南関東: 武蔵、相模、上総、下総、安房の合計
 北陸: 佐波、越後、越中、能登、加賀、越前、若狭の合計 / 東山: 甲斐、信濃、飛騨の合計
 東海: 伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、美濃の合計 / 畿内: 山城、大和、河内、和泉、摂津の合計
 畿内周辺: 近江、伊賀、伊勢、志摩、紀伊、淡路、播磨、丹波の合計 / 山陰: 丹後、但馬、因幡、伯耆、隠岐、出雲、石見の合計
 山陽: 美作、備前、備中、備後、安芸、周防、長門の合計 / 四国: 阿波、讃岐、伊予、土佐の合計
 北九州: 筑前、筑後、肥前、肥後、対馬、豊前、豊後の合計 / 南九州: 肥後、日向、大隅、薩摩の合計

図-1

魏志倭人伝にある卑弥呼の時代239年頃とは40年近くの開きがあるとはいえ、40年間で人口が8倍~10倍に激増するとは考えられない。

九州全体と比べても3倍~4倍以上になる。西暦200年の日本全国の推定人口は594,900人であり、35~42万人の人口だと北九州だけで日本全体の人口の約60%を抱える計算になる。

やはり陳寿は倭国の戸数(人口)も10倍していた。その理由は邪馬台国を大月氏国と同程度の人口を抱える国にする必要があったからに他ならない。

日本ではこの時代に戸籍調査などは行われていなかったが、さきほどの中国の戸籍の記録を基準に、魏志倭人に登場する国々の戸数を10分の1にし、1戸当たり5~6口(5~6人)として人口を計算すると以下のようなになる。

$$\begin{aligned}
 \text{対馬国} &= \text{千余戸} \rightarrow 1,000 \text{ 戸} \div 10 = 100 \text{ 戸} \times 5 \sim 6 \text{ 人} = 500 \sim 600 \text{ 人} \\
 \text{一支国} &= \text{三千許家} \rightarrow 3,000 \text{ 戸} \div 10 = 300 \text{ 戸} \times 5 \sim 6 \text{ 人} = 1,500 \sim 1,800 \text{ 人} \\
 \text{末盧国} &= \text{四千余戸} \rightarrow 4,000 \text{ 戸} \div 10 = 400 \text{ 戸} \times 5 \sim 6 \text{ 人} = 2,000 \sim 2,400 \text{ 人} \\
 \text{伊都国} &= \text{千余戸} \rightarrow 1,000 \text{ 戸} \div 10 = 100 \text{ 戸} \times 5 \sim 6 \text{ 人} = 500 \sim 600 \text{ 人}
 \end{aligned}$$

奴 国 = 二万余戸 → 20,000 戸 ÷ 10 = 2,000 戸 × 5~6 人 = 10,000~12,000 人
不弥国 = 千余家 → 1,000 戸 ÷ 10 = 100 戸 × 5~6 人 = 500~ 600 人
投馬国 = 五万余戸 → 50,000 戸 ÷ 10 = 5,000 戸 × 5~6 人 = 25,000~30,000 人
邪馬台国 = 70,000 余戸 → 70,000 戸 ÷ 10 = 7,000 戸 × 5~6 人 = 35,000~42,000 人

邪馬台国の推定人口は 35,000~42,000 人ほどの人口になる。

鬼頭氏の推定した年代が西暦 200 年頃で北九州の人口は 40,500 人とあるので、邪馬台国と北九州の推定人口を比較するため、統計の誤差±10%を考慮して推定人口の誤差の範囲を計算すると、

36,450 人 ≦ 40,500 人 ≦ 44,550 人

となり、邪馬台国の戸数表記を 10 分の 1 にした数字から割り出した推定人口 35,000~42,000 人はこの範囲に収まることがわかる。つまり、一つの国として考えられていた邪馬台国一国だけで北九州全体の人口に匹敵してしまうことになる。

邪馬台国は 20 数カ国の連合国家の総称

陳寿は魏志倭人伝の中で、暗に「邪馬台国は帯方郡の南にあり女王卑弥呼が都を置く国」と定義し、「奴国は邪馬台国最大の国で、北部九州の大国であり、女王の力の及ぶ範囲の南限の国」と定義し、「その南は敵国の狗奴国に接している」とも定義している。だが、対馬国から最も南に位置する奴国までの道程記事に登場する 20 数カ国の中に邪馬台国という名称の国はない。

ここにも「春秋の筆法」が働いている。つまり邪馬台国は「女王卑弥呼の力の及ぶ範囲の国全て」と述べているのだ。表現を変えると「邪馬台国は女王卑弥呼を擁立している 20 数カ国全体（連合国）を総称している」ことになる。つまり、これは「春秋の筆法」で云うところの「初見」的な隠微な表現といえるだろう。

帯方郡から見ると邪馬台国は東南海の中にある。だが海を渡り倭国の地に立つと邪馬台国という国は無い。そこには末盧国や伊都国など 20 数カ国の小さな国々があるだけだ。

邪馬台国は北部九州の小さな国々が集まった連合国家の総称として捉えない限りこの矛盾は解けない。陳寿の仕掛けた筆法の全体像がもう見えただろう。

現代でも、日本国は海外からは Japan などと呼ばれる。日本人は Japanese である。つまり、「倭」や「倭国」「倭人」は中国王朝や朝鮮半島諸国の漢字圏の人々が当時の日本国や日本人を呼ぶときに用いた呼称であり、「大倭」「邪馬台国」は当時の日本の人々が自分たちの国全体、連合国家を呼ぶときに用いた呼称なのである。

陳寿は邪馬台国の戸数も（結果として人口も）10 倍にして記述したことは間違いない。陳寿は皇帝の徳を高く見せるための手法として、邪馬台国を大月氏国に匹敵する大国に仕立て上げる必要があり、戸数表記も 10 倍にしたのである。

対馬国 から不弥国までの 6 カ国の戸数と人口を表記の 10 分の 1 にして合計すると、

100 戸 + 300 戸 + 400 戸 + 100 戸 + 2,000 戸 + 100 戸 = 3,000 戸

戸数 3,000 戸 = 15,000 ~ 18,000 人となる。

邪馬台国連合を構成する残りの国数（道程記事の奴国は 1 国とする）は、

26 カ国 - 6 カ国 = 20 カ国

戸数と人口を計算すると、

7,000 戸 - 3,000 戸 = 4,000 戸

4,000 戸 × 5 人 = 20,000 人 4,000 戸 × 6 人 = 24,000 人

となり、邪馬台国連合の残りの国数 20 カ国の戸数平均は、

$$4,000 \text{ 戸} \div 20 \text{ カ国} = 200 \text{ 戸}$$

となり、人口の平均は、

$$20,000 \text{ 人} \div 20 \text{ カ国} = 1,000 \text{ 人} \quad 24,000 \text{ 人} \div 20 \text{ カ国} = 1,200 \text{ 人}$$

となって、平均 1,000～1,200 人ということになる。

吉野ヶ里遺跡（佐賀県神埼郡吉野ヶ里町）の全盛期には外環濠の内部に 1,200 人ほどが生活し、周辺を含めた国全体では 5,400 人ほどの人口だったと推定されている。不弥国の後の道程に登場する 20 カ国は吉野ヶ里遺跡が形成していた環濠集落と同程度の規模だったと推定される。

投馬国（殺馬国・薩摩国）の戸数は 50,000 戸とあるが、10 分の 1 の約 5,000 戸、人口は約 25,000～30,000 人であろう。南九州（肥後・日向・大隅・薩摩）の推定人口は 64,600 人であり、薩摩国一国で約 25,000 人～30,000 人は妥当な数字だといえよう。

以上のことから、鬼頭氏の推定人口との比較では魏志倭人伝の戸数表記が 10 倍にされているとの推論は十分成り立つことが証明された。

末蘆国・伊都国・奴国・不弥国を北九州の遺跡から比定する

ここで一度魏志倭人伝の道程記事に登場する国々を北九州の遺跡と比較してみたい。考古学的な側面からの検証である。

魏志倭人伝の道程の里数表記は 10 の倍数というざっくりとした数字に丸めてあり、国と国との距離表記も正確であるとは考えられず、実際の遺跡間の距離との単純比較はできないかもしれない。それでも末蘆国から不弥国までの里数を魏志倭人伝の里数表記の 10 分の 1 にし、長里（1 里 = 434m）で計算して比較してみる価値はあるだろう。

『隋書』東夷伝倭国条に「夷人は里数を知らざれば、但計るに日を以てす」とあるように、倭人は日常生活の中で細かな距離を測る里数を必要としていなかったようである。例えば「○○国はあの山の向こうにある」・「△△国は日が出てから一番日が高くなるまでには着く」・「××国は日が出てから日が沈むまでかかる」のような大雑把な距離感覚で日常生活には支障がなかったのではないだろうか。

さらに、3 世紀という時代を考慮すれば、国と国との境界がはっきり定められていたかどうかとも疑わしい。魏志倭人伝の冒頭に「倭人は帯方郡の東南、大海の中に在り、山島に依りて国邑を為す」とあるように、この頃の邪馬台国は海に点在して浮かぶ島々や山沿いの洪積台地や川と川の間に来た丘陵地帯に居住地が分散していた。それらの小さな邑々が集まって国邑となり一つの小さな国を形成していたため、国と国との境界は極めて不明確だったと推定される。

国と国との距離を国邑の首長の居住地と居住地との距離とするのか、環濠で囲まれた集落と集落の距離とするかで国家間の距離表記は全く違ってくる。しかも、里数を理解している倭人であっても、国と国との距離や方位などに関する感覚は大雑把であっただろうと推定されることから、中国からの使者の問いかけには、日常の大雑把な距離感覚で答えた可能性はある。

陳寿は道程記事を『魏略』から引用している。しかも自ら手を加え修正している部分があることも分かっている。

邪馬台国内の国と国との距離

邪馬台国内の里程記事をそのまま検証してみることにする。但し、陳寿が邪馬台国内の末蘆国から不弥国までの里程も 10 倍表記にしているという前提である。

「南に千里余り行くと、末盧国に着く。東南に向かって陸上で五百里行くと伊都国に着く。東南に向かって百里行くと奴国に着く。東に行くと不弥国に百里で着く」

これを 10 分の 1 にして現在の距離に換算すると、

一、末盧国から東南に五百里 伊都国 $500 \text{ 里} \div 10 = 50 \text{ 里} \times 434 \text{ m} = 21.7 \text{ km}$

二、伊都国から東南に百里 奴国 $100 \text{ 里} \div 10 = 10 \text{ 里} \times 434 \text{ m} = 4.34 \text{ km}$

三、奴国から東に百里 不弥国 $100 \text{ 里} \div 10 = 10 \text{ 里} \times 434 \text{ m} = 4.34 \text{ km}$

移動は陸行（徒歩）、陸行一日は 40 里、17.36 km 換算なので、末盧国から伊都国までは一日強かかる計算である。だがこの道程は陸行ではなく水行（理由は後述）である。伊都国から奴国、奴国から不弥国までは各々 4 分の 1 日の距離なので、半日で往復出来る距離ということになる。

末盧国から伊都国まで

では末盧国、伊都国、奴国、不弥国がこの距離の範囲に収まるのかどうか、距離の起点と終点をはっきりさせるため現在発掘されている遺跡で検証してみることにする。

末盧国は現在の松浦にほぼ比定されている。伊都国は律令時代に「怡土郡」と「志摩郡」が合併して糸島となり、伊都国は現在の糸島市に比定されている。奴国や不弥国も諸説あって比定地が確定されていないが、奴国は「那津」の地名が残る博多湾岸が一番有力視されており、板付遺跡（博多区板付）や須玖・岡本遺跡（春日市岡本）のある現在の福岡市博多区周辺と、内陸部の平塚・川添遺跡（朝倉市平塚）のある甘木・朝倉地区周辺説もまた有力である。どちらも弥生時代に大規模な環濠集落があった場所であり、板付遺跡は日本最古の環濠集落で、弥生時代中期の BC9 世紀頃から博多湾沿岸地域の中心地となったと考えられている集落である。

一支国を発った魏の使者を乗せた船が到着したと推定されるのは、東松浦半島先端部の呼子^{よぶこ}が有力である。魏志倭人伝の記事には「末盧国に着く。四千戸あまりある。山と海にはさまれて生活している。草木が繁茂しており、歩いている前の人が見えない」とあり、呼子のリアス式海岸のような複雑な地形を想起させるからである。また、末盧国から伊都国までの里程は陸行 500 里と記述されているが、草木が繁茂して歩いている前の人が見えないほどであるとわざわざ記述されていることから、呼子から伊都国までのルートは陸行ではなく水行だったと推定される。

玄界灘に面した呼子の大友遺跡（佐賀県唐津市呼子町大友）を船の出発点とし、当時は東西から海が入り込んでいたため、潤地頭給遺跡（福岡県前原市）を到着地とすると、その直線距離は約 28.4 km である。魏志倭人伝では末盧国から伊都国の距離は 50 里 = 21.7 km と推定されているので、

$$28.4 \text{ km} - 21.7 \text{ km} = 6.7 \text{ km}$$

となり、50 里の 21.7 km とは約 30.8% の誤差、半島の付け根部分に位置する唐津市の桜馬場遺跡（唐津市桜馬場）や菜畑遺跡（唐津市菜畑）と糸島市の西に位置する石崎・曲り田遺跡（糸島市二丈石崎）までの場合は約 20.1 km で 7.3% ほどの誤差であり、国の史跡に指定されている三雲・井原遺跡（福岡県糸島市三雲）の間は約 28.1～28.4 km で、その誤差は約 30% である。

平原遺跡や 3 基の古墳で知られる曾根遺跡群は、端梅寺川^{ずいばいじ}と雷山川^{らいざん}に挟まれた曾根丘陵地帯に点在している。伊都国の中心はこの曾根丘陵に造られた環濠集落と、そのすぐ東の三雲・井原遺跡であると推定されている。この丘陵一帯には推定で 500 人程度の人々が居住していたとされている。つまり、魏志倭人伝の記事の伊都国の戸数 1,000 戸は、実際には 10 分の 1 の 100 戸で推定人口は 500～600 人であると推定しているが、考古学的に推定された三雲・井原遺跡の人

口ともほぼ一致している。

伊都国から奴国まで

次に、伊都国と奴国の距離である。

魏志倭人伝ではその距離を百里としていることから、

$$100 \text{ 里} \div 10 = 10 \text{ 里} \times 434 \text{ m} = 4.34 \text{ km}$$

となり、伊都国と奴国はかなり近接していることがわかる。

奴国は邪馬台国の海上交通の要衝である博多湾に面した、今日でも「那津」の地名が残る福岡市周辺であることは間違いないだろう。

伊都国と奴国の間には高祖山^{たかす}（416m）が立ちほだかっている。伊都国から奴国に入るには高祖山の北の博多湾岸を通るか、あるいは山越えで日向峠を抜けるルートしかない。

博多湾岸のルートでは、三雲・井原遺跡から 4.34 km は糸島半島の付け根部分、現在の福岡市の西区辺りになる。西区の博多湾に面した今山遺跡（福岡市西区横浜）との距離は約 6.3km・今宿五郎江遺跡（福岡市西区今宿東）は約 4.8km である。

三雲・井原遺跡からの距離を奴国の中心的な遺跡との距離で測ると、年代的にも古い比恵・那珂遺跡群（福岡市博多区）は約 17.7 km、板付遺跡は約 19.5 km、須玖・岡本遺跡までは約 18.9 km になる。

伊都国と奴国の距離の起点と終点を国の中心地と隣国の中心地の遺跡間の距離ではなく、国邑と国邑（国のはずれと隣国のはずれ）の距離と考えれば伊都国の邑を三雲・井原遺跡、奴国の博多湾岸で一番西のはずれにある邑を今宿五郎江遺跡に仮定すれば 10 里 = 4.34 km（実際の距離は約 4.8km）の距離表記で矛盾は無い。もう一つの山越えのルートでも三雲・井原遺跡から国の史跡に指定されている吉武高木遺跡（福岡市西区吉武）までが 6.8km で、距離の誤差は少ない。

この時代は国と国との境界が明確に定められていたとは考えられず、吉野ケ里遺跡では大人^{たいじん}など身分の高い者は環濠や城柵で集落が囲われた高床式住居や楼閣のような住居に住み、下戸^{げこ}など身分の低い者は環濠や城柵で囲まれていない、環濠集落周辺の標高数mから数 10m の洪積台地や丘陵などに建てられた竪穴式住居に住んでいたことがわかっている。

また奴国は邪馬台国最大の国であるが、福岡平野には那珂川、御笠川、室見川などの河川が集中するため、博多湾に近く標高の低い土地は常に河川の氾濫に晒され、当時の人々は河川の氾濫を回避するため住居や重要な建物は河川と河川の間から数m以上高い微高地や丘陵地帯、山の麓の小高い洪積台地に点在する集落をいくつも形成する必要があった。現在確認されている福岡平野の遺跡は、福岡平野の丘陵地帯や山沿いの洪積台地に点在し、那珂川と御笠川に挟まれた丘陵地帯を上流に遡るように、比恵・那珂遺跡群、板付遺跡、須玖岡本遺跡から大宰府へと続き、さらに内陸部の筑紫平野の甘木・朝倉地区の遺跡へと続いている。甘木・朝倉の集落遺跡は筑後川北岸の丘陵地帯に筑後川とほぼ平行に点在している。

政治と経済の中心だった比恵・那珂遺跡群

博多湾に近い比恵・那珂遺跡は日本最古の環濠集落である。比恵・那珂遺跡は B C 9 世紀に環濠集落が造られた後、B C 7 世紀には一度環濠集落が消え、B C 3 世紀頃になって細方銅剣を副葬品にした有力者の墓が造られ、身分の低い者の墓を区分する溝や墳丘などで区画した区画墓が出現し、比恵・那珂遺跡に環濠集落が復活する。

B C 2 世紀になると丘陵の上に運河や集落を南北に貫く道路が造られ、掘立柱建物や高床式倉

庫などが計画的に配置されるようになる。丘陵には「比恵の大溝」と呼ばれる幅 5m 深さ 2.5m の環濠集落を区分するための大きな溝が掘られる。青銅器やガラスの生産も始まる。鉄器の出土量も多く、鉄製の刃先の鍬や板状鉄製品が出土していることから、鍛冶工房では鉄製品が作られていたこと、中国製の辰砂や朝鮮半島系土器なども出土しており、朝鮮半島や中国との交易が紀元前のそれもかなり早い時期から行われていたことも判っている。

比恵遺跡では 2 世紀前半（弥生時代後期）から 3 世紀後半（古墳時代前期）にかけて大規模な土木工事が行われ、丘陵の北端の博多湾側には幅 5m 深さ 2.5m の運河が造られた。博多湾から運河を経由して直接船が接岸できる船着場だったと考えられている。縄文海進の影響が残り海岸線が近いので、船は博多湾から運河を通り直接岸壁に横着けし、朝鮮半島や中国からの舶載品や日本海ルートからの物産品などの取引を行う「市」が開かれていたのではないだろうか。

那珂遺跡には前方後円墳の那珂八幡古墳から三角縁神獣鏡の副葬品が発掘されており、首長級の住む環濠集落だったと想定されている。

奴国は光武帝から「漢委奴国王印」を授かり、漢の冊封を受けた国である。比恵・那珂遺跡や近隣の須玖・岡本遺跡は奴国の政治・経済・交易の中核を担っていたと考えられ、かつては博多湾岸にあった奴国が勢力を内陸部へと拡大し、那珂川や御笠川上流の甘木・朝倉から筑後国、現在の久留米市や八女市の有明海まで続く一大国家を形成して行ったのではないだろうか。

政治・経済・交易の中心は博多湾岸の比恵・那珂地域や須玖・岡本地域にあり、甘木・朝倉地域や久留米・八女地域は稲作を中心とする奴国の食料供給地帯だったのだろう。甘木・朝倉地域の古墳からは三角縁神獣鏡などは出土するものの、博多湾岸の遺跡に比べ副葬品は見劣りがするといわれている。これは首長など身分の高い者たちの居館が博多湾岸に集中していたからに他ならない。

奴国から不弥国まで

再び道程記事の検証に戻ろう。

不弥国は奴国の東百里、つまり 10 分の 1 の 10 里、4.34 km にある。不弥国は現在の宇美町に比定する見解が一般的である。道程・里程記事を解明する中で、女王国は不弥国であることがわかっていく。

比恵・那珂遺跡群や板付遺跡、須玖・岡本遺跡の東方約 5 km の位置に宇美八幡宮（糟屋郡宇美町）がある。宇美八幡宮の由緒書では、臨月の神功皇后が石を抱いて三韓征伐の新羅征討に赴き、帰国後に応神天皇を生んだという伝説の生誕地が宇美町であり、「産み」が宇美町の由来であるとされている。古事記の仲哀天皇の神功皇后記・新羅征討後の応神天皇生誕の記事では、

「故、その政未だ竟へざりし間に、その懐妊みたまふが産れまさむとしき。すなはち御腹の鎮めたまはむとして、石を取りて御裳の腰に纏かして、筑紫国に渡りまして、その御子は生れましと。故、その御子の生れましし地を號けて宇美と謂ふ」

と、その由緒書きを裏付けている。

この宇美八幡宮が距離的にも位置的にも女王卑弥呼や台与の宮室、楼観のあった場所ではないだろうか。残念ながらそれを証明できるような文献資料も考古学的な遺物もない。

擬定した理由の一つは『日本書紀』神功皇后紀三十九年に魏志倭人伝が引用されていて、編者が神功皇后を卑弥呼に比定していることが明らかなこと。もう一つは宇美八幡宮のその地形にある。宇美八幡宮周辺を上空から見ると、宇美八幡宮の奥宮が宇美川沿いの標高 46m の丘陵の上の宇美公園の中にある。浦尻池や新大福池など大小の池が周辺に点在するその地形は、かつて

環濠集落のあった可能性を強く感じさせる。

邪馬台国の政治・経済・交易の中心、奴国は博多湾岸の比恵・那珂遺跡や須玖・岡本遺跡周辺にあったことは間違いないだろう。

宇美八幡宮の奥宮と板付遺跡の直線距離は約 5.6km、比恵遺跡とは約 7.8km である。

当然、祭祀を司る卑弥呼も奴国の中心か周辺に居なければならない。卑弥呼の巫女としての役割は政治的な部分に限らず、航海の安全や朝鮮半島や中国との外交問題を亀卜などで占い、神憑りして神からの託宣を受けることにあったはずだ。つまり、卑弥呼は必然的に政治の中枢に近いところに居なければならないのである。

国と国との距離・方位

ここまで末羅国から不弥国までの道程を辿りながら、国と国との距離を、主な遺跡と遺跡や擬定した候補地など、実際の距離と魏志倭人伝の道程記事にある里数とを比較してきた。

末盧国と伊都国、伊都国と奴国との距離は主な遺跡の実際の距離と道程記事の里数を 10 分の 1 にした距離とは、ほぼ近似値であった。だが、伊都国の三雲・井原遺跡の中心的な集落だった遺跡を起点にすると約 4 倍もの開きが生じている。

魏志倭人伝に「山島に依りて国邑を爲す」とあるように、北部九州の国々は小さな集落が山や島、平野に点在して邑になり、その邑々が統制されて国邑を構成し連合国家の邪馬台国となっていた。つまり国と国との距離は、国の中心に位置する首長が居住する環濠集落と隣国の環濠集落との距離ではなく、環濠集落周辺に点在する最も近い邑との距離、隣国の支配が及ぶ範囲との距離を表していたのである。

一、末盧国（大友遺跡）から水行 500 里（21.7 km）→ 伊都国（潤地頭給遺跡）約 28.4 km

二、伊都国（三雲・井原遺跡）から陸行 100 里（4.34 km）

博多湾側→奴国（今宿五郎江遺跡）約 4.8 km

高祖山超え→奴国（吉武高木遺跡）約 6.8 km

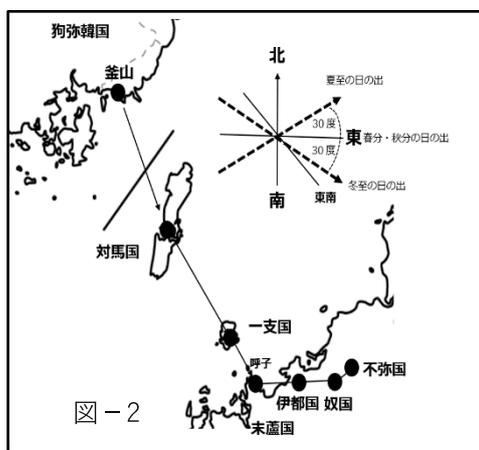
三、奴国（板付遺跡）から陸行 100 里（4.34 km）→不弥国（宇美八幡宮の奥宮）約 5.6 km

さらに視点を変え、国と国との位置関係（方位）という要素を加えるとさらに明確になる。

30 度の方位のずれ

右の狗弥韓国（釜山）から不弥国までの道程の地図（図-2）を見ていただきたい。魏志倭人伝の狗弥韓国（釜山）、対馬国、一支国、末盧国、伊都国、奴国、不弥国の道程記事を方位だけで示すと、南、南、南、東南、東南、東となっているが、実際の方位は狗弥韓国から、東南、東南、東南、東、東、北東になっていて、魏志倭人伝の記事の方位とは全てにずれが生じている。

次の地図（図-3）は魏志倭人伝の道程記事のとおりだ。その理由は地図の角度を単純に時計回りに 30 度傾けたからである。この地図の傾きは夏至の日の出の位置に東の方位を合わせている。



太陽の高さの角度は最も低い冬至と最も高い夏至とで46.8度の違いがある。冬至と春分、春分と秋分、秋分と冬至はその半分の23.4度太陽の角度が違う。その太陽の高さの角度の違いを地平線から出る日の出の方位の違いに置き換えると、夏至と冬至ではほぼ60度（福岡市の場合）、春分・秋分と夏至・冬至とはその半分の30度の差になる。

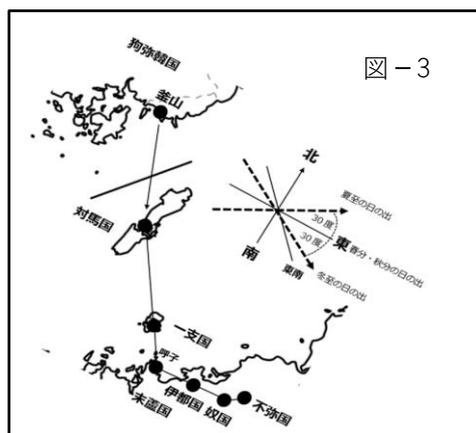


図-3

3世紀頃の魏の使者は異国の地で東西南北の方位についてどの程度正確に把握していたのであろうか。方位磁石は紀元前からあったようだが方位磁石（羅針盤）が航海に使われるようになったのは11世紀頃と云われている。方位磁石を持たない人々は太陽や月や星の位置で方位を判断するしかなかったはずである。魏の使者が異国の地の倭国で方位を確かめる方法が日の出の太陽の位置だったとすれば、下図のように30度程度日の出の位置が北に移動した夏至の前後に倭国を訪れていたと推定することができる。

つまり太陽の日の出の位置がほぼ30度北に移動するこの時期に魏の使者が倭国を訪れ、日の出の位置で東の方位を確認していたとすれば魏志倭人伝の道程記事の方位に見事に一致するからだ。玄界灘の冬は強い北西風、夏は台風で荒れることが知られている。夏至の6月20日前後であれば本格的な台風シーズンにはまだ早く、気候も暖かで玄界灘を航海するには良い時期だったのではないだろうか。

夏至に近いある日。日の出とともに魏の使者を乗せた船が末蘆国の呼子を出港する。魏の使者は船縁に立っている。同行している倭国の使者に船の目的地の位置を訪ねると、倭国の使者は伊都国の津（港）の方向を指さす。魏の使者は日の出の位置を東の方位に定め、倭国の使者が指さした方角を確認すると東南であった。距離は陸行50里、船は1日で120里進むことができるので、伊都国の港には正午前に到着する計算になる。

国と国との距離は九州北部の遺跡や宇美八幡宮の奥宮の位置関係（方位）からも立証できるのである。

三、周旋可五千餘里

魏志倭人伝の中で倭国の大きさについて記述した部分「参問倭地、絶在海中洲島之上。或絶或連、周旋可五千餘里」は、倭の地は海の中の洲の上、島の上に孤立して居住し、あるものは離れた孤島であり、あるものは連続した列島である。その全体の範囲は周囲5,000里余りであるという意味である。この数字も陳寿の筆法により10分の1で計算すると、

$$5,000 \text{ 里} \div 10 = 500 \text{ 里}$$

$$500 \text{ 里} \times 434\text{m} = 217 \text{ km}$$

になる。対馬から大分県の宇佐までは直線距離で約210kmである。

では、周旋可五千余里の「周旋」はどのように解釈

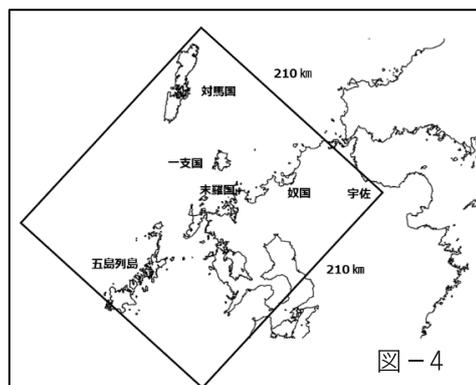


図-4

すればよいのであろうか。この解釈にも何通りかあるようだが、周旋はそのまま解釈すると「ぐるりと巡る」という意味だが、「方」は二辺の合計を表すので、「周旋」は四角形の四辺の距離を表していると解釈する。つまり、邪馬台国全体の大きさを表しているのだ。「周旋五千里」は一辺 500 里で囲まれた、500 里四方の範囲になる。つまり邪馬台国は約 217 km 四方で囲まれた範囲ということになる。これを九州北部の地図（図-4）に表すと、対馬と大分県宇佐までの直線距離が約 210 km なので、対馬と宇佐を結ぶ線を一辺として四角形を描くと左の図のようになる。西の五島列島は松浦郡であったことから末蘆国の支配下だったのだろう。

四、女王国の東千里餘

魏志倭人伝に「女王國東渡 海千餘里 復國有 皆倭種」という記事がある。女王国の東の海を渡って 1,000 里余り行くとまた国があり、皆倭人だという意味だ、女王国は不弥国なので、女王国の東は九州の東のはずれであり、そこから 1,000 里、但しここでも陳寿の筆法が働くので、海を渡って 100 里=43.4 km にある国、中国地方か四国が想定される。しかし魏志倭人伝では夏至の太陽の日の出の位置を東としていた可能性が高く、北が東に 30 度傾いた方位から想定すると不弥国から北東の位置にある中国地方が東の方向になる。東の方向の四国は東に 30 度傾くと南東に方位がずれるため北東の方角にある中国地方の長門国が有力な候補地であろう。

五、卑弥呼に仕える婢人の人数

『(卑弥呼)は王と為りて自ら以來、見ゆること有る者少なし。婢千人を以て自ら侍らしむ。唯男子一人有りて飲食を給し、辞を伝へて出入す』

この記事中には「婢千人」とあるが、やはり 10 分の 1 の 100 人程度の女たちが女王卑弥呼に仕えていたのだろう。不弥国の推定人口が 500~600 人であることから、妥当な人数である。その多くの女たちに混じり卑弥呼の身の回りの世話をしているひとりの男の記述がある。

「ただ一人だけ男子がおり、飲食を給仕し、言辞を伝えるために出入りしている」

この男は卑弥呼の託宣を聴いてその意味を解く「審神者」という役目を担った男のことだろう。『日本書紀』仲哀天皇九年三月一日条に「皇后は吉日を選んで齋宮に入り、自ら神主となられた。武内宿禰に命じて琴をひかせて、中臣烏賊津使者を呼んで、審神者とされた」とあることから、卑弥呼の身の回りの世話をする男も中臣烏賊津使者と同じ役割だったのだろう。おそらく神功皇后は神憑りすると意味不明の言葉を発したに違いない。まさに卑弥呼と同様「事鬼道、能惑衆（鬼道を事とし、能く衆を惑わす）」状態である。トランス状態で発せられる意味不明な言葉を解かりやすい言葉に翻訳して伝える役割を担っていたのが審神者だったと考えられる。

また、審神者は奴国の中枢部にいる大夫などから重要な問題を卑弥呼に伝えることも職務の内であった。そして審神者は、卑弥呼から重要な託宣が下されれば、一刻も早く奴国にその内容を伝えなければならない。そのためにも卑弥呼はできるだけ政治の中枢に近い場所に居なければならない。だが、あまりに政治や経済の中心に居たのでは神籬や神奈備のような神聖な環境は保てない。

『居処・宮室・楼観・城柵、厳かに設け、常に人ありて兵を持ちて守衛す』という記事から、女王卑弥呼の居た場所は城柵に囲まれた環濠集落であったことがわかる。

宇美八幡宮の奥宮のある宇美公園の小高い丘に卑弥呼の居館や楼閣があったとすれば、比恵・那珂遺跡や須玖・岡本遺跡周辺からは間に標高 100m 以上の月隈丘陵があり、視界が遮られているため直接望むことはできないが、標高 46m 丘の上に立つ楼閣はかなり遠方からも望めたであ

ろう。この地から環濠跡や掘立柱建物の遺構、銅鏡や亀卜など祭祀に使った遺物が多く発掘されるようなことがあれば、この予測は裏付けられるのだが、個人的な推定に過ぎない。

六、卑弥呼の墓の大きさも 10 倍されている

魏志倭人伝では卑弥呼の墓の大きさを「径百余歩」と記述している。帯方郡からの使者張政が卑弥呼の墓の大きさを「径」と表した理由は墓の形状にあり、その形状が円墳または円の形状に近い方墳であったからだ、素直にとらえるべきであろう。もしも墓の形状が前方後円墳であったのなら、「周旋」あるいは面積から長さの表記に変わったといわれる「方」で墓の大きさを示したであろうし、さらに卑弥呼の死は 247 年頃と推定され、この時代の北部九州ではまだ円墳や方墳が築造されていた。前方後円墳の築造が始まる 3 世紀後半にはまだ 50 年ほどの開きがあった。

次に「百余歩」の墓の大きさの問題である。魏の時代の一步は現代の二歩にあたり、一步の長さは約 1.35m なので、単純に計算すると百歩で $1.35\text{m} \times 100 = 135\text{m}$ になる。

百余歩の「余」の部分をも 10% として加算すれば $135\text{m} \times 1.1 \text{ 倍} = 148.5\text{m}$ になる計算だ。

つまり、卑弥呼の墓は直径が約 148.5m の円墳か円の形状に近い方墳ということになる。ちょっとした小高い丘のような形状だろうか。だが、魏志倭人伝の中に記述されている里程記事や国の戸数（人口）は 100 の倍数で表記され、陳寿の「春秋の筆法」により 10 倍で表記されていることが解明されている。つまり、卑弥呼の墓の大きさ「径百余歩」もまたその 10 分の 1 の「径 10 歩余り」と解釈しなければならない可能性がある。

径 10 歩 = $1.35\text{m} \times 10 = 13.5\text{m}$ 、「余り」を 1 歩と解釈すれば $1.35\text{m} \times 11 = 14.85\text{m}$ となり、張政が見た卑弥呼の墓の大きさは直径が約 14.85m 程度の円墳のような形状だったことがわかる。

邪馬台国の女王卑弥呼の墓にしては小さすぎると感じるかもしれない。なにしろ日本で一、二位の大きさを誇る仁徳天皇陵（大仙陵古墳）は 486m、応神天皇陵（誉田御廟山古墳）は 425m もあり、この巨大な古墳と比べると 20 分の 1 か 30 分の 1 程度の大きさしかない。うっかりすると墓とは気付かれないかもしれない。

こんな小さな墓が卑弥呼の墓なのだろうか。

まず、女王卑弥呼が本当に「女王」だったのかという問題がある。つまり卑弥呼は小国の連合国家である邪馬台国の行政や外交などを統治する「国王」だったのか。それとも邪馬台国は行政権と祭祀権が分かれていて、連合国家邪馬台を統治する「行政の王」が卑弥呼とは別に存在し、卑弥呼は祭祀権のみを行使する「祭祀王」だったのではないかという問題である。それは 2 世紀に起きた倭国大乱を女王卑弥呼の擁立で合意に至り国が治まったという記事から想定すると、この時代の邪馬台国には、国を支配する「祭祀権」とも呼べるような権力が、国の行政権と同程度かそれ以上の力を持ち存在していたと推定できる。そのように想定しない限り、巫女でありシャーマンだった卑弥呼が何故女王と呼ばれるだけの権力を持ち得たのかの説明がつかない。

陳寿は帯方郡から邪馬台国までの距離、その道のり、里数、国々の戸数、邪馬台国の力の及ぶ範囲や卑弥呼の墓の大きさを 10 倍にしている。倭人の習俗も脚色され儒教に近い礼節を備えていると持ち上げている。つまり、卑弥呼像もまた 10 倍に脚色されていては不思議ではないことになる。

卑弥呼は「祭祀王」でもなく、邪馬台国連合が最も信頼し影響力のある巫覡（シャーマン）に過ぎなかったが、陳寿によって「祭祀王」どころか倭国王にまで祭り上げられてしまった可能性

もある。

卑弥呼の墓の大きさは国王の権威を象徴するような大きな墓でも、「祭祀王」にふさわしい大きさの墓でもない可能性は高い。但し邪馬台国連合を代表する巫覡（シャーマン）としてふさわしい副葬品と一緒に埋葬されたはずである。さらに卑弥呼の墓は邪馬台国の中枢部からさほど遠くない距離にあるはずだ。候補地は奴国を中心に不弥国や伊都国またはその周辺国である。

そして帯方郡からの使者の張政等は一大率のある伊都国の、来賓を迎えるための居館を拠点に行動していたと考えられ、その行動範囲はさほど広くはなかったはずだ。その張政等が卑弥呼の墓を見ているとすればその範囲はさらに狭まって来る。伊都国周辺が第一の候補地、ということになる。

卑弥呼の墓を比定するための条件をまとめてみる。つまり必要条件ということになる。

- 一、奴国やその周辺国にある
- 二、3世紀中頃の築造で、墓の形状は円墳または円の形状に近い方墳
- 三、想定される墓の大きさは直径 13.5m～14.85m程度
- 四、巫覡（シャーマン）に相応しい副葬品が埋葬されている
- 五、殉葬者の墓が近くにある

最後の五については、魏志倭人伝には「殉葬する者奴婢百余人なり」とあることから、実際の殉葬者の人数は10分の1の10人程度であろう。

これらの条件を満たす墓が奴国周辺にあれば、卑弥呼の墓に十分比定できるが、五つ目の殉葬者については若干引っかかるものがある。いくら託宣による影響力が強かったとはいえ、巫覡でしかなかった卑弥呼の墓に殉葬者を埋葬するかどうか、という疑問である。陳寿は卑弥呼を大月氏国と肩を並べるほどの大国、邪馬台国の女王にしてしまったが故に、卑弥呼が埋葬されている墓には殉葬者がいなければ辻褄が合わないと考えた可能性がある。つまり、殉葬者の有無が卑弥呼の墓を特定するための必要条件とは云えない可能性もあるのだ。

また卑弥呼の墓でなんらかの呪術的な要素のある遺物が発見されれば尚条件は満たされるだろう。ただし、古墳の埋葬品は墓が荒らされ盗まれてしまっていることがあるため、その場合は他の条件を満たしていても卑弥呼の墓を比定するのは難しい。

だが、こんなに都合の良い条件の揃った墓が北部九州にあるのだろうか。

ところがこれらの必要条件をほぼ満たしている墓がある。「^{ひらばる}平原古墳一号墓」がそれである。

七、卑弥呼の墓の殉葬者の人数

平原古墳の発掘調査に携わった、異端の考古学者として知られる原田大六の著書『実在した神話』では「殉葬墓(殉死者の墓)と考えられる土壙が墓域内及び排水溝の内部に見受けられ、一緒に数人を埋葬していたようだ」との記述がある。魏志倭人伝の「殉葬する者奴婢百余人なり」が10倍にされていると考えれば整合性がある。

平原一号墓は卑弥呼の時代よりやや古い時代の墓のようだが、どうやら原田大六が発掘に関わったというだけで調査が進まず、はっきりとした年代測定はされていないようだ。

平原古墳一号墓は卑弥呼の墓か

福岡県平原市にある平原遺跡は昭和40年に行われた発掘調査で5基の墓が発見されている。平原市の旧地名は糸島郡前原町平原で、一大率が置かれていた伊都国のあった地である。平原遺跡は現在平原歴史公園として整備されている。公園はもともと蜜柑畑だった所で、発掘調査が開

始される直前、遺跡は蜜柑畑にするために土が大きく掘り返され破壊されてしまっていた。

一号墓の遺跡は、公園の芝生の中にこんもり土が盛り上がった部分で確認できるが、その大きさから、それが女王墓であると説明されても、俄かに信じがたいと誰もが感じるに違いない。

遺構は東西 17m、南北 12m の長方形の方形周溝墓で、弥生時代終末期から古墳時代（約 1,800 年前）にかけての遺構であるとされ、魏志倭人伝に出てくる「伊都国」の王墓とされている。

平原一号墓はこんもりと土が盛られた四隅が丸い方墳であったとみられている。魏の使者は卑弥呼の墓の大きさを「徑百余歩」と記していることから、卑弥呼の墓は円墳だった可能性が高い。角が丸くこんもりと土の盛られた 17m×12m の方墳を見て円墳のように見えたかのかどうかは疑問の余地はある。

一号墓の中央には長さ 3m の刳拔式木棺があり大量の朱が蒔かれていた。朱（硫化水銀）は古来、辰砂や丹と云われ大変な貴重品だった。

出土品から一号墓は女性、二号墓は男性ではないかと言われている。

一号墓からは銅鏡 40 面やガラス玉、勾玉、メノウ製管玉、素環頭大刀（鉄刀）、鉄器などの出土品が多数出土している。その中でも出色なのは巨大な銅鏡で、内行花文鏡は直径が 46.5 cm もあり現時点では日本で最大の銅鏡である。また、天皇家に伝わる三種の神器である鏡、勾玉、劍のすべてが出土している点も注目されている。その埋葬品から王墓であることは間違いなく、弥生時代で一番大きな素環刀太刀が出土し、女性の墓からしか出土しない耳瑠（ピアス）も出土していることから、一号墓の被葬者は女王であったと考えられている。そして、その被葬者は女王卑弥呼であり、卑弥呼は伊都国出身で、生誕したこの地に埋葬されたのではないかと考えられている。

八、銅鏡百枚もまた 10 倍にされていた

最後にこの記事を問題にしたい。

『魏の明帝の景初二年六月、倭の女王、大夫難升米等を遣わして帯方郡に詣らしめ、天子に詣りて朝献せんことを求む』

これは、魏志倭人伝の中の卑弥呼の時代の魏への朝貢記事である。239 年、女王卑弥呼は難升米等を魏に派遣し、明帝に男の生口（奴隷）4 人と女の生口 6 人、織物などを献上した。そして倭国は魏の冊封国となり、卑弥呼は魏の明帝から「親魏倭王」の官爵号と金印を賜り、他にも絹や金など多くの下賜品を受け取った。それが次の品々である。

絳地の交竜錦五匹、絳地の縹栗罽十張・蒨絳の絹五十四、紺青の絹五十四、紺地の句文錦三匹、細班華罽五張、白絹五十四、金八両、五尺の刀二口、銅鏡百枚、真珠・鉛丹各々五十斤。

この中の銅鏡百枚は三角縁神獸鏡だったという説がある。三角縁神獸鏡は近畿圏の古墳の埋蔵物として発掘されることが多く、邪馬台国畿内説論者の多くが明帝から卑弥呼が賜った銅鏡は三角縁神獸鏡だったという説を唱えた。だが、三角縁神獸鏡は現在 330 枚ほどが発掘されているといわれ、その多くは仿製鏡（国産）だとする説がある。一方では舶載鏡（中国製）を複製したのだという説もあり未だに決着を見ない。

だが、銅鏡百枚の 100 という数字もまた「春秋の筆法」により 10 倍されているのではないだろうかという疑問は払拭できない。銅鏡は祭祀に用いる貴重な品物だった。他国を支配下に置く場合には貴重な下賜品としての役割も果たしていた。人口 5 万人弱、30 カ国にも満たない小国の連合国家邪馬台国に 100 枚もの舶載鏡は必要だったのだろうか。100 枚では希少性が失われてしまうのではないか。邪馬台国の規模を考えれば、10 分の 1 の 10 枚でも十分だったのではな

いだろうか・・・。

銅鏡 10 枚説はあくまで一、から七、までの結論を積み上げた上での推論である。少なくとも倭人伝の中では銅鏡 100 枚は全体最適とは云えないからである。

— 了 —

【参考文献】

- 『倭国伝』 講談社学術文庫 藤堂明保・竹田晃・影山輝國
『正史三国志 1・4 (魏書 I・IV)』ちくま学芸文庫 今鷹真 井波律子訳
『中国通史』講談社学術文庫 堀敏一
『古代朝鮮』講談社学術文庫 井上秀雄
『漢帝国 400年の興亡』中公新書 渡邊義浩
『魏志倭人伝の謎を解く』中公新書 渡邊義浩
『現代語訳魏志倭人伝』新人物文庫 松尾光
『魏志倭人伝・後漢書倭伝・宋書倭国伝・隋書倭国伝』岩波文庫 石原道博編訳
『邪馬台国の全解決 中国「正史」がすべてを解いていた』言視舎 孫栄健
『草書体で解く邪馬台国の謎 書道家が読む魏志倭人伝』 梓書院 井上悦文
『儒教』講談社学術文庫 浅野祐一
『古事記』角川ソフィア文庫 中村啓信 訳注
『日本書紀(上)全現代語訳』講談社学術文庫 宇治谷孟
『日本古代史を科学する』PHP 新書 中田力
『卑弥呼以前の倭国五〇〇年』PHP 新書 大平裕
『ここまでわかった! 卑弥呼の正体』新人物文庫「歴史読本」編集部編
『三国史記倭人伝』岩波文庫 佐伯有清編訳
『古代日中関係史』中公新書 河上麻由子
『日本書紀(二)』岩波文庫
『日本書紀(上)全現代語訳』 講談社学術文庫 宇治谷孟
『古代史講義』ちくま新書 佐藤信編
『考古学講義』ちくま新書 北條芳隆編
『弥生時代の歴史』講談社現代新書 藤尾慎一郎
『海の向こうから見た倭国』 講談社現代新書 高田貫太
『人口から読む日本の歴史』講談社学術文庫 鬼頭宏
『人口の中国史』岩波新書 上田信
『実在した神話 発掘された「平原弥生古墳」』學生社 原田大六
『比恵・那珂遺跡群～弥生時代後期の集落動態を中心として～』 久住猛雄 埋
藏文化財研究集会 2009 資料集